統合失調症闘病記の書名のテキストマイニング

○小平朋江¹・いとうたけひこ²

(¹聖隷クリストファー大学・²和光大学)

キーワード：ナラティブ、教材、手記、

A textmining study of titles of autobiography of people with schizophrenia

Tomoe KODAIRA¹, Takehiko ITO²

(¹Seirei Christopher University, ²Wako University)

Key Words: narrative, educational materials, autobiography

問題と目的

統合失調症当事者の闘病記は研究資料やナラティブ教材としての意義があり、教育活用するために小平・いとう (2012) は統合失調症の闘病記に関する単行本を 217 冊収集しリスト化した。本研究では、統合失調症闘病記をナラティブ教材として教育活用するために、前述の闘病記リスト (小平・いとう, 2012) の 217 冊の書名・副題を対象にテキストマイニングの手法により、その表現の特徴、特に用いられた単語を分析することで、時代的変遷を可視化して確認することが目的である。

方 法

小平・いとう (2012) によって収集されリスト化されている 217 冊の統合失調症の闘病記に関する文献情報を分析対象とする。書誌情報データを、テキストマイニングソフトウェアである Text Mining Studio 4.1 によって分析した。

結 果

(1) 全体の書名・副題の形式的特徴 (基本情報)

総冊数 (217) における平均使用文字数は 11.6 字であった。内容語の述べ単語数は 910 単語であり、内容語の異なり度数 (単語の種類数) は 530 単語であった。

(2) 使用頻度の多い単語 (単語頻度分析)

最も高い頻度で出現した単語は 29 頻度の「統合失調症」で、次に 15 頻度の「心」(26 回)、次に「生きる」(18 回) があられ、「精神障害者」と「病」の出現頻度は 12 回であった。ひらがな表記の「こころ」も 10 回あり、漢字表記と合わせると 36 回出現し、「こころの病い」としての統合失調症の特徴をよく表している。

(3) 3つの時代区分ごとの使用頻度の多い単語

2002 年の病名変更を境にして、それ以前では「分裂病」(10 回)、「精神分裂病」(3 回) が多く、2003 年以降は、「統合失調症」(28 回) の表現が多く用いられている。しかし、これら 3 つの単語の頻度を合計しても 47 回で全体の 21.7% であり、書名に病名が出てくる場合は少ないといえる。「分裂病」「体験」「少女」「自分」「記録」「精神病棟」などは 2002 年以前によく使われた表現であり、「患者」「精神障害」「生きる」は 2003 年-2007 年によく利用され、「母」「軌跡」「なれる」「統合失調症」「風」「人生」などは 2008 年以降によく用いられた単語である。

(4) 書名・副題の病気に関する単語から見た特徴

「精神分裂病」「分裂病」「分裂病者」21 件と「統合失調症」29 件のどちらかが書名・副題に明示されているものは合計 49 冊で全体の 22.6% であった。時代別に見ると「精神分裂病」7 件、「分裂病」11 件、「分裂病者」3 件で、主に病名変更した 2002 年以前の書名の 2 割に用いられていた。「統合失調症」を含む書名は 29 件で、病名変更の 2002 年の 1 件を例外として、それ以外は 2003 年以降の書名に使用されている。この急増は病名変更で統合失調症患者や家族がよりカミングアウト

しやすくなったことの反映であろう。しかし、2003 年以前でも以降でも約 8 割の書名には病名が明示されていない。これ以外の表現として、「病」または「病い」12 件のうち 11 件が「心」または「こころ」という単語と結びついて用いられている。

(5) 病気・精神障害者「を生きる」当事者から、病気・障害「と(ともに)生きる」当事者への時代的变化

3 番目に多用された単語は「生きる」18 件であった。病気や精神障害者が「生きる」にかかる書名・副題は 11 件あり、病気「を生きる」型 4 件と、病気「と(ともに)生きる」型が 7 件の 2 つに分類できた。2002 年までは 2 件とも「を生きる」のみであった。2003 年-2007 年は 6 件のうち「を生きる」が 2 件で、4 件が「と生きる」「と共に生きる」であった。2008 年以降の 3 件のうち、すべてが病気・障害「と(ともに)生きる」型であった。「を生きる」型の 4 件は 2005 年までに限られ、「と(ともに)生きる」型の 7 件は 2003 年に 2 件初出し、2006 年以降はこの型に限定されるという時代変遷が確認された。

考 察

病名明示が少ない理由としてスティグマ・偏見の影響、著者の病識や納得の度合い、闘病記の本質としての自分を語ることの意義、の 3 つが考えられた。病気・障害「とともに生きる」の表現が 2003 年から現れ「を生きる」の表現が消えたことは、病いと闘う姿勢から客体化しつつ共生する姿勢へと移行した事の反映であろう。

【謝辞】本研究は平成 23 年度～平成 25 年度科研費基盤研究 C (課題番号:23593195) の助成を受けた。

【文献】小平朋江・いとうたけひこ (2012). 統合失調症の闘病記のリスト：ナラティブ教材の可能性を展望する 心理学, 33(2), 64-77.